

朝鮮史研究、植民地研究に必要不可欠の資料を厳選。

日本植民地下の朝鮮研究

第二回全5巻

広瀬 順皓 編

クレス出版

日本植民地下の朝鮮研究 第二回全5巻

広瀬 順皓 編

- 第5巻 近代朝鮮史 上巻 菊池 謙讓 著 定価18,000円(税別) ISBN978-4-87733-590-8
- 第6巻 近代朝鮮史 下巻 菊池 謙讓 著 定価16,000円(税別) ISBN978-4-87733-591-5
- 第7巻 朝鮮文化史論 細井 肇 著 定価18,000円(税別) ISBN978-4-87733-592-2
- 第8巻 朝鮮史話 幣原 坦 著
- 朝鮮開教五十年誌 朝鮮開教監督部 編
- 天道教と侍天教 渡辺 彰 著 定価24,000円(税別) ISBN978-4-87733-593-9
- 第9巻 朝鮮は起ち上る 鎌田沢一郎 著
- 朝鮮開拓誌 原田 彦熊 著 定価18,000円(税別) ISBN978-4-87733-594-6

A5判/上製クロス装 揃定価 94,000円(税別)

2011年6月末日刊行 ISBN978-4-87733-595-3(セット) C3322

- 第1巻 総督政治 全 青柳綱太郎 編 定価18,000円(税別) ISBN978-4-87733-563-2
- 第2巻 朝鮮統治論 初版 青柳綱太郎 著 定価24,000円(税別) ISBN978-4-87733-564-9
- 第3巻 最近の韓国 松宮春一郎 著
- 朝鮮の人口研究 善生 永助 著
- 朝鮮統治秘話 朝鮮行政編輯局 編 定価26,000円(税別) ISBN978-4-87733-565-6
- 第4巻 朝鮮に於ける内地人 朝鮮総督府 編
- 近代朝鮮史研究 朝鮮総督府 編 定価24,000円(税別) ISBN978-4-87733-566-3
- 第一回全4巻 揃定価 92,000円(税別) ISBN978-4-87733-567-0(セット) C3322

クレス出版好評既刊書

朝鮮総督府 生活状態調査 地域編

全5巻 広瀬 順皓解題

大正末年から昭和10年にかけて朝鮮総督府官房庶務部調査課が刊行した一連の調査資料のなかで、生活状態調査として刊行されたものうち、朝鮮総督府嘱託善生永助が編纂執筆した調査報告書。

①水原郡 ②濟州島 ③江陵軍 ④平壤府 ⑤慶州郡

揃定価75,000円 ISBN4-87733-321-5(セット)

朝鮮総督府統計要覧

全10巻 朝鮮総督府編 広瀬順皓解題

土地、気象に始まり、産業、金融、財政、交通、警察、衛生等、植民地朝鮮をデジタル化した経済的社会的研究の基礎資料。多くの項目については「最近数年分を列記して」いるから、各項目にかかるその変遷消長の状態を通観することができる。

揃定価158,000円 ISBN4-87733-257-X(セット)

増補朝鮮総督府三十年史

全3巻 朝鮮総督府編

朝鮮総督府の施政を歴代総督毎に分けて詳細に記述し、日本の朝鮮支配四十年を通覧する第一級史料。「施政方針」「財政」「産業」と続く各項目は、当該時期の朝鮮統治を簡潔に物語り、日本の朝鮮植民地支配研究の辞書代わりにも利用できるレファレンス・ブック。

揃定価36,000円 ISBN4-87733-062-X

朝鮮満蒙地誌叢書

全3巻 朝鮮及満州社編

大正7年に刊行された『朝鮮及満蒙叢書』を底本とする朝鮮・満州・シベリアの貴重文献。日本近代史、東アジア近代史研究必備書。

朝鮮地誌 定価26,000円 ISBN4-87733-081-X

満州地誌 定価16,000円 ISBN4-87733-082-8

西比利亞地誌 定価 8,000円 ISBN4-87733-083-6

満州国現勢

全9巻 満州国通信社編 井村哲郎解説

建国から康德10年版まで刊行された、満州国に関する基本的な事項の変遷を調べるために有用な年鑑。満州国の特記すべき事績、中央行政統治機構の概説と主要官僚の略歴等を詳細に記述し、年表、主要統計も掲げている。満州国をめぐる内外情勢に関する解説もある。

揃定価250,000円 ISBN4-87733-100-X,101-8

満洲誌草稿

全15巻 関東都督府陸軍經理部編 安富歩解説

明治39年より同44年に至る実地調査報告に基づく膨大かつ詳細な秘密資料。豊富な数量データを表や図で示し、図版や写真も多数収載。

第一輯 一般誌全4巻、第二輯 満洲地方誌(奉天省、吉林省、黒龍江省)全7巻、第三輯 接壤地方誌全3巻、附録 全1巻

揃定価298,000円 ISBN4-87733-114-X(セット)

韓国化気どりの伊藤統監 (1907年)

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町14-5 メローナ日本橋
☎(03)3808-1821 ㊟(03)3808-1822 <http://www.kress-jp.com/>



株式会社クレス出版

第5巻

近代朝鮮史 上巻

菊池謙讓著／昭和12年／鶏鳴社
【内容】 韓末の中軸となつた教獄事件、韓末三代の概説、天主教東と学、大院君の出現、高宗迎立、高宗初年重要事件、丙寅教案、大院君の摂政と国王の大婚、シャーマン号焼打事件、江華戦記、南延君墓陵発掘事件、大院君と国防、書院撤廃と暴動、日韓絶交時代、北門の閉鎖、大院君の退隠、国王親政と閔妃、日本の征韓論と朝鮮の交隣説、朝鮮の開国、江華会議、朝鮮開国使節の日本訪問、日本理事官の朝鮮訪問、北方会議、花房公使の来任、朝鮮開国の三名相、国王の親政、日本のアメリカ及フランス紹介頼末、修信使節として金弘集、李載先獄事、領選使として金允植の使命、問議使として魚允中、韓米の修交を環ぐる日本と支那、壬午軍乱、新時代の展望、西北経略と北方国境、発末年記

第6巻

近代朝鮮史 下巻

菊池謙讓著／昭和12年／鶏鳴社
【内容】 甲申政変、政変と国王、甲申政変と日本、天津条約と朝鮮、大院君の還国、巨文島事件、金玉均再挙事件、朝鮮政局を横断したメレンドルフ、定界談判、韓露陸上通商条約、袁世凱と朝鮮監国、王妃の不例、閔氏一門の蟠居、借款を廻る国際政略、防殺令事件、東学党の乱、日清戦争と朝鮮、成敬役と平壤役と黄海海戦、甲午改革、朝鮮監政と井上公使、朴泳孝と金弘集の対立、李垞鎔謀反事件、金弘集内閣の崩壊、朴泳孝の亡命、乙未事変前記、乙未事変本紀、乙未事変後記、李周会事件、国王奪取事件と広島獄、国王の外幸、行在所重要日記、慶運宮還幸、皇帝式挙行、清涼里洪陵の国葬、朝米派の抬頭と欧米の権益、毒茶事件、独立協会と皇国協会の対立、朝鮮と列国、京釜鉄道と西北鉄道、平城離宮造営、森林会社と龍岩浦租借、韓末の文化

第7巻

朝鮮文化史論

細井 肇著／明治44年／朝鮮研究会
【内容】 朝鮮の師儒と文廟、朝鮮の儒流と書院、上古時代、三国時代、統一後の新羅朝、高麗朝時代、李朝時代、半島の禪史小説

第8巻

朝鮮史話

幣原 坦著／大正13年／富山房
【内容】 日・鮮関係の沿革略、朝鮮における箕子の遺跡と記録、曾戸茂梨之処と熊成峰、支那政府が朝鮮を支配した最初の経験、京城の古塔、朝鮮の所謂倭寇、三浦と三港、日・鮮関係から見た対馬、三隠、李栗谷、足利学校の朝鮮本、文祿役における我が軍の京城占領、籠城の蔚山、城郭、慕夏堂、閔羽崇拝、孝宗が清を伐つ企を起した事情、水原の顕隆園、間島国境の談判、朝鮮保護志、天道教、侍天教

朝鮮開教五十年誌

朝鮮開教監督部編／昭和2年／大谷派本願寺朝鮮開教監督部
【内容】 朝鮮教界の概観、開教と建設、朝鮮文化への貢献

天道教と侍天教

渡辺 彰著／大正8年／渡辺彰
【内容】 立教の由来、教義の要領、伝教の系統、分派の端緒、経路、結果、現今の実状、敘述の総括、

第9巻

朝鮮は起ち上る

鎌田沢一郎著／昭和8年／千倉書房
【内容】 民族躍進か 国難加重か、満洲開発の一つの鍵、朝鮮の重大位置、朝鮮は起ち上る、歴代総督の統治方針、宇垣政治の批判、経済封鎖と朝鮮の役目、資本投下の安全地帯朝鮮、金の朝鮮、棉花の朝鮮、北鮮開拓と羊毛問題、輝く水産界、世界第一の黒鉛鉱業と特殊鉱物、鉄も内地の五倍、石炭埋蔵量十一億噸、誇るべき電力統制、工業朝鮮の豪華版、山は緑に、その他の産業、日本海中心時代来る、朝鮮統制経済論、資源は招く

朝鮮開拓誌

原田彦熊・小松徹三共著／大正2年／朝鮮文友会
【内容】 総論、財政、交通運輸並通信、農業、商業、工業、林業、水産業、鉱業

本シリーズに含まれる刊行物の年代は日清戦争直後から敗戦に至るまでの時期を取り扱う。それは日本が韓国を植民地化する事実上の第一歩であった。

前回、ジャーナリスト、朝鮮史学者の青柳綱太郎著『総督政治』、『朝鮮統治論』のほか、『最近の韓国』から当時の朝鮮史研究の水準を示すものとして貴重な『近代朝鮮史研究』まで7冊を4巻に纏めて『日本植民地下の朝鮮研究』として刊行した。

今回も『国民新聞』の記者であった菊池謙讓の大著『近代朝鮮史 上・下』、東京朝日新聞記者細井肇の『朝鮮文化史論』、政治家幣原喜重郎の兄東洋史学者坦が著した『朝鮮史話』等8冊を5巻で出版する。そもそも日本の朝鮮史研究は、『日韓併合秘史』以来数多くの研究がなされてきたが、それらは前回にも取り上げた善生永助ら、朝鮮総督府の官吏や雇員ないしは篤志家などが、営々として積み上げた成果に基づいているのは周知のとおりである。それらは同時代史として現在でも大きな価値を有している。同時に戦前の朝鮮史研究には針小棒大と言つては語弊があるがイデオロギーに傾く傾向も否定しえない。現在の朝鮮史研究あるいは植民地研究にとつて欠くことのできない資料を厳選した。敢えて『日本植民地下の朝鮮研究』を刊行するゆえんである。

第5巻 近代朝鮮史 上巻

日韓絶交時代

壬辰の役熄んで幾何もなく朝鮮をして焦土の巷、廢墟の國となした丙子の役も玆に定まり六十年間戦禍の行程を續けた朝鮮も國を立て民を安んずるの國策としては只だ東に對して交隣の信を修め、西に向つては事大の禮を奉ずるの外に別途なく何等の妙案も無かつたのである。

抑も朝鮮は日本に對して何故に交隣の信を修めねばならなかつたのか、日本に對する朝鮮の眼は何か、維新日本が擡頭して老支那と對座した頃まで朝鮮は日本を目して無學の國となし、日本人を評價して刀劍を握る只だ一個の軍卒と見做し、明治日本が特派した名譽の官吏紳士に對してすら江戸倭、差倭の文字を以て彼等の官文書に輕視された。而かも尙ほ歴代の儀禮として交隣通信を廢棄せざる所以は何か、曰く

壬辰役によつて知つた日本の武勇は朝鮮をして心膽を寒からしめた。故に之を制し武勇

第8巻 朝鮮史話

第十九話 間島國境の談判

間島とは、もと朝鮮人が鐘城穩城の間から豆満江を越えて耕作を始めた二川分流點の一地名であつたが、朝鮮人の移住が次第に多くなつて、豆満江沿岸一體にひろがるやうになつてから遂にその全體を總稱することゝなつた。このことは乙酉勸界使李重夏の啓草別單に見えてゐる。間島をまた墾島とも書く。朝鮮音が相通するのである。その墾の字の畫を省略して、良島とも書く。またこれを北墾島ともいふのは、南間島が出来てから、それに對する名稱となつたに過ぎない。要するに川と川との間の新墾地をいつたのである。

南間島とは近代鴨綠江の北岸に朝鮮人の移住者が多くなるに従つて、こゝを豆滿江の北岸に對照して稱する名である。また西間島ともいつてゐる。然しこの地は素より支那の領土であつて、國境談判の問題にならない。

北墾島即ち朝鮮と支那との談判の問題になつた元來の間島は、右いふ通りの漠然たる名稱であるから、その境もまた判然としてゐるといふ譯でない。然し